

## 三日月の物語しは：文苑

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 木星  |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌   |
| 巻   | 8 5   |
| ページ | 5 4 - 5 6   |
| 発行年 | 1901-06-03  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2298/5129">http://hdl.handle.net/2298/5129</a> |

## 文苑

十四

### 三日月の物語りしは

木 星

下界に夜は更けゆくらん、濃藍の色とはに深き西の空の奥に、ねのれに一時ばかり後れてをり來にける夕づ、と出あいて三日月の物語りしは、今よひかの人の世にいとあはれなる事をば見て、今に胸のさわぎぞやみがたき、ねん身はわらはよりしばし長くみ空にとどまり給へりければ、かの出來事の成行をば知り給はん、わらはが細き臂をあけて人の世の上に見さげつるは、はや黄昏時にて夜の神はその森かしこの谷の隈より始めて、薄墨の暗の翼をやうくく擴げそいんどぞしたりし頃ぞかし、わらはもとよりかゝる忌はしきやみのわざを心に厭ふこと深かくりけれど、さちなく光の力よはき身の、かの望の月なんぞの様に暗の魔神をば岩のはざま繁木がもとなどに追ひこむる力ではなく、さりさてかの旗のはびこりたどるを見んことのこのかよわき心に得堪ふ可くもあらねば、恨をのみ眼をこちて急ぎかの人の世を辭するが常になん、さるからに今宵もかのあさましきやみの姿を見ぬひまにといそぎ空ををりなんどしたりける折から、ふとかあしき姿のわが眼にぞとまりつる、さるはいといたしくしげなる女の姿にて、かの大野が原を流るゝ瀬あらし川の獨木橋の上に佇み居りき、時は暮れ六つの鐘岩上の寺の鐘樓より悲しげなる調子を野山にぞき散らす頃なりし、流の末にはなほ夕榮の色をうつして、こゝしき巖さまゝの形したるが立ちならへる間をまがりく

ぬりて大海が原へといききゆく果ては、折から立ちこむ夕のもやにつ、まれてきだかにも見えず  
。凡そこのあたりには柴つみ下ろす筏もあらねば、さ鮎つる竹皮の笠の主も見えず、たゞはやき流の  
岩にくだけて白き泡をふくもさびし、女の姿はギリシャの昔の女詩人のそれに似てそれよりは劣り  
たれど賤しからず、ふりあげて我かたを仰がし顔には限りなき愁をふくみ、涙の玉はその半ばつぶ  
れる睫の下にみち、たり、かたく結べる唇にはあけの色うせてかみしめし前齒のあとにかへがた  
き決心ぞあらはれたる。そは身を投ぐる人の姿なり、夕つ、はたへかねて叫び出しぬ。さなり、さら  
はもさこそ思へ、今にそのすかた忘れがたし、身のまわりいと賤しげなれどその氣高さは生れあか  
らとれぼしく、髪をつやなくなりたるはさかなき浮世の波に洗ひさらされたればなるへし、絶望のも  
だへにやあらん、深くも長きため息は小さき肩を刻みて涙はあられの如く進りいでぬ、をり、あは  
れみを乞ふさまにて涙あふる、眼をあげて我かたを見あげしその顔ばせ、むかし匂ひし薔薇の色あ  
せて青ざめし頬の上には熱き涙のあとしるく、夕くれのよき光に一しは青白う見ゆるぬかの色は  
この世のものともればわぬまですこや、打ちふるふ鬢のゆるぎにそもいくばくの恨みやこもらん  
、やみはこのひまに山下の村を襲へり、二つ三つ小さき灯の光ちらちらと見ゆそめぬ、次ぎて田中の  
小村をつくみぬ、耕す馬は嘶きて家路に向へり、牛追ふ童歌かたげたる若者それ等は皆たのしげな  
りき、かへり見ればかなたの谷に湧き出でし暗は今小さき丘一つ越えてかの瀬あらき川の獨木橋を  
も襲はんとせり、忽ちにして風一陣、峯をこね谷をわたれば岩も鳴りぬ、松も叫びぬ、流の音は一  
しは高うなりまざりぬ、女はなほ橋の上に立てり、川下の夕榮の名残も今は消失せんとす、見よ

岩と岩との間にも潜める暗のうめごくあり、女の佇める橋の下にも隠れたる暗の頭をもたげて躍り出でんとするがあり、かくて内より外より相應じて暗一度この橋上を傾する時、あはれぞの時よ、いかならん、そは更らのは見能はざる所なり、忍びざる所なり、心をさだめ眼をさぢていそぎ空ををりぬ、山の端の一本松の木の間にとりて今一度と見下ししをりは、暗既に橋の上を襲ひて女はなほ立てる様にもありき、あらぬ様にもありき、流の音のみ暗にもしるく響き更たれりき、あはれ情ある君の後のことをば知り給ひつる、づけよこの事わが心にかゝりてたへがたければと、三日月のひたすら問よるに夕づ、はいとはれやらぬ面もちにて、われ今宵はかの鉾かたげたる若者と山下の村の若き少女との樂しき戀を見守れりしかば、さることには少しも氣つかてありきと、その答はすげなかりしが、さすがに眼は涙にくもりて見ぬ。

### 西峰の一夜

狂 川 生

朝夕、草を踏み、露をわけて、西庭を逍遙する時、われ常に此山を望みて、愛々の念に堪へず。松の梢に、霧やうやく霽れて、山容ブロシアン藍に洗はれたるが如き時。或は日、東林にいでて、心地よき一日の初め光、うす薔薇色を其一角に匂はする時。紫嵐西に流れて、吉次越一亘の連轡をつみ、紅霞やがて其中腹に揺曳すれば、己が心、宛然野禽の翹の如く軽く飛び立つを覺ゆ。或は、夕日其肩に沈まんとして、楊、黄、青、黒、紫、いろいろの雲の、其背後を彩る時。壯嚴類ひなき天の大光